

個人山行 行仙宿巡回と体調確認

平成30年5月15日（火） 晴れ 同行 玉岡 明 玉岡 憲明

奈良在住の乾 克己氏から「昨年11月千丈平から深仙宿を歩いたところ、可成り茂って来ており迷い易いところもあって気になっている」とのお便りを頂いたもので、乾さんならずとも、こちらも他人事ではなく、何とか早いとこ処理したいものだと気ばかり焦っていたのである。わが体調は相変わらず年毎に退調気味で、千丈平まで上がるのさえ大丈夫だろうかとにかく息子の都合に便乗して本日、行仙宿まで上がることにした。行きしなに平素ご無沙汰している十津川村折立の玉置藤夫氏を訪ねてと考えたところ息子に「そんな遠周りをしているは行仙小屋まで行けるかわからん」と北山村大沼経由の近道を通ることに同意出発6時を5時に繰り上げさせられる。

息子の協力なしでは何処へも行けぬ身の上、ご無理ごもつとも従うしか仕方ない。和気の森辺りにかかっていた雲気も不動峠を抜けるとからっと好天気味に変わる。ストックを片手に登山口で一旦鉄階段を上がりだしたところ息子はもう1本のストックを取りに車に戻って2本を使って上るよう促される。階段を上がったところで早「今日はここまでか」と大凡悲観しかけていたが、ふと足元を見ると川島会長の手記にあったように多分生熊氏の手になる径の修復（段差のやり替えと径ならし）の有様やかねて新聞に感動されて森岡氏（池田市）上月金治氏（神戸市）ご両家家族ぐるみでの伊富喜師慰霊の墓石据え付けのことなどを思いくべると、ここはなんとしても気持ち奮い立たせて行宣宿までは行かねばならぬとゆう気持ちになった。そのうえ昨年5月聖護院の肝入りで浅村明伸師（奈良市）が精魂込めて修復して下さった行者堂の役の行者像のことなどを考えると鞭を打たれるようなきもちとなって気を取り直して2本のストックを手にして上がりだした。上天気になったのは幸いであるが、第一ベンチ、第二ベンチともだいぶ腐食が進んでおり、これも修復せねばならぬ課題も増してやらねばならぬことはあとからあとから続出してきて際限がない。行仙宿、他の維持作業で現役の方々苦労を思いやるが多くなった。

ようやくの想いで行仙宿行者堂に辿り着いた、約3時間もたっている。すぐさま行者堂を開けて1年ぶりのおわびも、なにはとあれ休憩して元気を取り戻すことの矢先、三又路一带を見回すと数年前に間伐された桧の材料はまだ健在である。でも大型ストープを据え付けたので薪の消費量も大で段差材に充てる程の材料は薪となって煙にきえてしまっている。建設よりも消費が優先するのであろう。ま、それにしても千丈平から深仙宿への道標の標識には充分あると確認して小屋に入る。案の定人間一人も居なかった。大江加予子さんから寄贈して下さった伸縮自在の立派な背後が立てかけられている。

聖護院では秋の9月に深仙灌頂堂で何年かぶりに灌頂の儀式を執行されるという。今や深仙宿での香水水が得られないので千丈平の湧き水（釈迦の水）を汲んで儀式に使っていただけなければ昨年5がつの法要のお札に代えられるのではないかと

考えたのであった。だが？今の我が体調では千丈平までの往復すらも不可能である。せめて本番の作業は若手の皆さんにお願いして我は道標標識のペンキ塗りなど裏方の作業に回り背後から支援する格好で協力したい。

道中ブヨなどの虫にたかられて閉口した。小屋の中は窓を閉め切つてあるので虫も入ってこず暫く昼寝でもしたいと思つたが帰心矢の如く、おにぎり弁当を腹に詰め込んで早々に退散することにして腰を上げる。

書架の本は家に持ち帰って読んでみたいと思つていた本も回収の書籍は見当たらず只今西錦司監修の「大興安嶺探検」一冊のみを持ち帰つた。

山は登りよりも下りが問題である。安全の為に腰、肩、にザイルを固定してくれて一歩一歩ヨチヨチ、トボトボ、と足を運ぶ。径が45度以上に曲がるここでは平衡を失つて真横に引き倒されこと二度立ち上がることもままならぬ。2時間半を要し林道までたどりついた。

帰路、北山村大沼の公園で新しく喫茶店ができたという情報に車で寄つたが終日開店ではないらしくコーヒーにはありつけず代わりに入浴した。これは案外体の筋肉をほぐすのに役立つたらしく翌日は体の調子が楽であつた。

